

# アークベルによる 宮城県気仙沼市で実施した プロジェクトマッピング制作記

アークベル株式会社 企画制作部／チーフディレクター 狩野康之

アークベル株式会社は、フジテレビ制作で毎週土曜日の朝に放送中の「めざましどようび」番組内の「CHANGE THE WORLD(チェンジザワールド)」というコーナーで、「気仙沼プロジェクトマッピング ナイト」と銘打ち行ったプロジェクトマッピング(以下、マッピング)の企画制作を行った。2014年8月3日に宮城県気仙沼市で現地の夏祭り当日にあわせてマッピングイベント本番を実施し、その模様は8月9日にフジテレビ系列で全国放送された。

## 1 気仙沼マッピング企画の経緯

今回の企画は、ONE-LINEという地元の団体がクリスマスイルミネーションを毎年冬に行っていることからヒントを得た。そこで気仙沼の夏の夜を彩るのはプロジェクトマッピングで、というのが発端だった。フジテレビの番組担当者からアークベルに話があり、マッピングの実施が決まり、企画からCG制作、実際の投影まで、約3ヵ月で完成させた。

「2011年3月11日の東日本大震災のあったあの日から3年が経った。かつて被災地とされ何度もニュースで取り上げられてきた場所も、最近では目にする機会が減った。復興が進んでいると勝手に思っていたところも、実際に現地に行ってみると十分な状態ではない。気仙沼も同様で、津波の爪あとも生々しく、まだまだ以前の生活を取り戻したとは言えない」とフジテレビのディレクターから話を聞いた。

そこでフジテレビから「めざましどようび」番組内で「気仙沼を明るくしてイノベーションを起

こそう！」というコンセプトを合言葉に、アークベルにマッピングを企画・制作してほしいとの依頼だった。8月の本番までの間、企画や準備の模様も順次「めざましどようび」の番組内で紹介され、マッピングができるまでの制作の過程が視聴者には手に取るようにわかったと思う。

## 2 テーマ「未来の気仙沼」

ロケハンが4月21日に行った。まずはマッピングの対象となる建物探しからはじまった。気仙沼向洋高校、気仙沼女子高等学校など津波の際にテレビ中継などによく登場した建物も回ったが、どれもマッピングの場所としては決め手に欠けた。最終的に選んだのが気仙沼市魚市場の建物だった(写真1)。ここがマッピングの場所として最適な環境であると判断した理由には、場所が広く建物も大きく、たくさんの観客が一堂に介して見ることに適していたこと、そして何より魚市場という気仙沼にとってなじみのある建物だったということが挙げられる。テーマは地元の方の声を聞いて



写真1 気仙沼市魚市場の建物

回った結果、これからの気仙沼、みんなの笑顔、すばらしい景色など、いろいろなヒントが集まった。これらを参考に「未来の気仙沼」というマッピングのテーマが決まった。

当社のイベントレント部取締役ディレクターの田邊一人と、今回テクニカルディレクターとして参加した鈴木博は「マッピングは白ベースの建物のほうがより効果を発揮しやすいこと、建物の前に見学スペースやプロジェクタを設置する場所があることなど諸条件に最も適していたのが魚市場の建物だった。プロジェクタは当社が所有するパナソニック製の20,000ルーメンの高輝度DLPプロジェクタを3台使用した」と話す。

今回のマッピングは「未来の気仙沼」をテーマに、子供たちが描いた絵と、リポーターが撮影した地元の方々の笑顔を用いて表現した。震災を乗り越えて未来をみつめる子供たちが描く気仙沼の将来の姿、そして地元の方々にも協力いただいた笑顔の写真。それらを素材としてマッピング作品を作成した(写真2、3)。

### 3 投影システム設計とテンプレート制作

マッピングの投影システム設計やプロジェクトのテンプレート制作も行った。

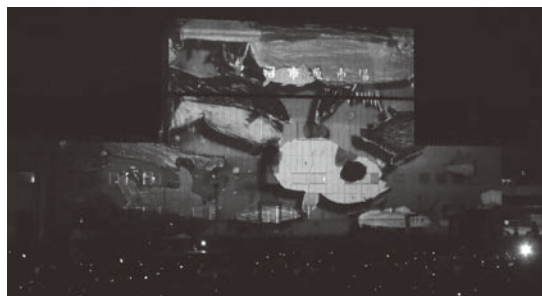


写真2 子供たちが描いた絵



写真3 「未来の気仙沼」をテーマに地元の方々の笑顔が映し出された

投影システム設計とは、大きな建物に対して何台のプロジェクタで、どのように割り振りし、マッピングは何を使って調整して、プレディングはハードまたはソフト側で、というふうに同期や再生のシステムを含めて構築していくことである。実際の投影方法を検討する上で重要であり、ハードとコンテンツの橋渡しとして、プロジェクタの台数や投影方法だけでなく、映像の制作の仕方にも関わってくる。

今回の投影システムはプロジェクタ3台に対し、それぞれPCを用意し、親となるPCの計4台を同期させるプログラムを組んだ。プロジェクタそれぞれのPCに建物へのマップを担当させ、3台のPCの親となるPCが全体の同期の制御を行う仕組みである(図1)。

テンプレート制作とは、映像を作るうえでの型のようなもので、特に様々なクリエイターが関わるプロジェクトでは共通の下敷きにして制作していくも

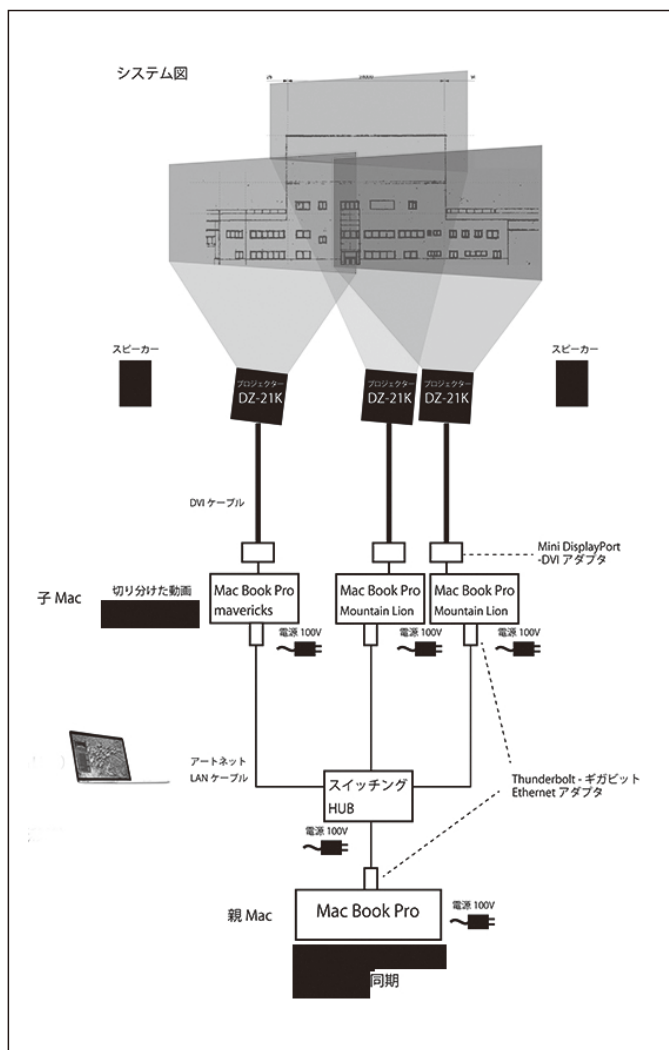


図1 システム図

のとなる。今回、図面はもらっていたが、窓の位置や大きさまでは記入されていなかった。そこで写真から割り出して、その後ミニチュアを作って投影テストを重ね、7月2日に現地で投影テストを行った。本番用のプロジェクタ約半分の輝度で10,000ルーメンのプロジェクタを3台使用した。本番を想定し、メディアサーバーの同期とプロジェクタの調整、そしてコンテンツの映り具合の確認を行った。

ディレクションを狩野が担当し、機材面はテクニカルディレクターの鈴木、CGワークはアークベルの林、アートワークはデザイナーの吉田氏、送出プログラムは小島氏と主な制作だけでも様々な人々が関わった。コンテンツの制作に関してはシナリオハンティングをもとに、アイデアを出し合い、吉田氏がラフスケッチを仕上げた。そこから演出コンテに落とし込み、狩野と林と小島でCGとアニメーションとコンポジットを担当した(図2)。

本番当日の8月3日の昼には、気仙沼出身で自らの自宅も被災した小野寺五典防衛大臣(当時)がオペレーションルームに現れ、準備を進めるスタッフを激励した。小野寺氏は公務のため本番は見ることはできなかったが、オペレーションルームで準備されていたマッピングの映像を見て感動したと話した。多くのマッピングスタッフが小野寺氏の訪問には励まされた。

## 4 地震による影響

プロジェクタのマップは前日の深夜までかけて調整を済ませたが、マッピング当日の朝、地震があり、気仙沼市は震度3。大きな問題ではないと思われていたが、本番直前、前日に調整を終えたはずのプロジェクタが地震でズレていたことが判明。マッピングを調整しなおそうと試みるが、当日の晴天が災いした。明るすぎて調整グリッドが見えない。本番のタイムリミットが迫る中、オペレート室のある向かいの建物からは詰め掛けた観客が一目で見渡せた。必死で調整作業を行い何とか本番に間に合わせた。

通常のマッピングイベントであれば1日に3~4回と複数回の上映を行うが、このイベントでは1回



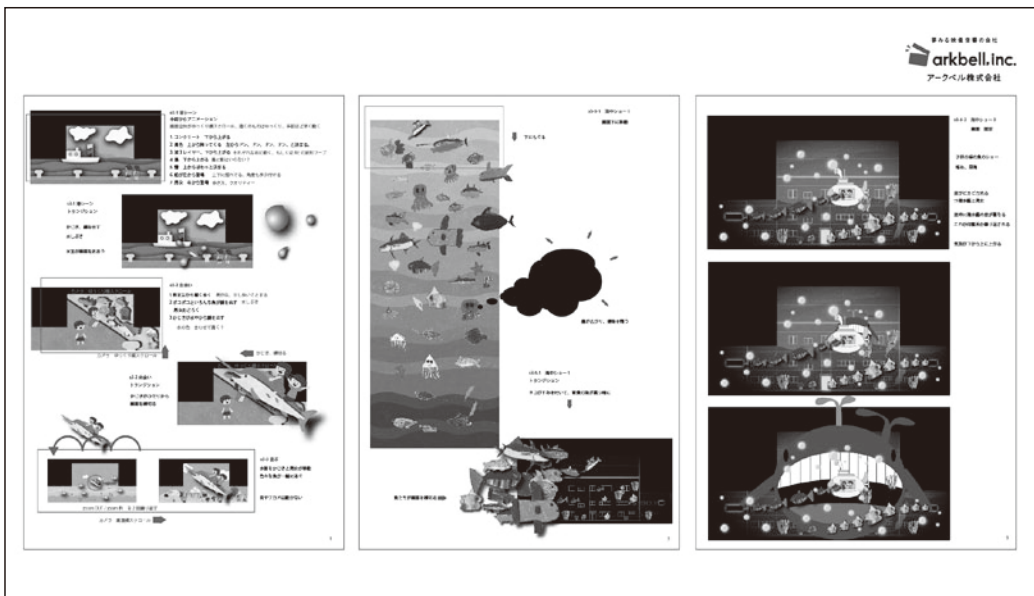


図2 演出コンテ例



写真4 本番上映1回のみでの緊張感あふれるオペレート室

だけの本番での上映だった。そのために本番の上映はいつも以上に緊張感が増した。しかし会場には多くの観客が集まり、子供たちや地元の人々の笑顔があふれ「未来の気仙沼」にふさわしい催しになった(写真4)。

## 5 さいごに

ロケハンからシナリオハンティング、投影テストとマッピング本番の送出と、何度も現地に足を

運んだ。その模様もオンエアされたことでマッピングの企画から制作、上映まで番組を続けてみる人にはよくわかる企画となっていた。

アーケベルでは、神奈川県逗子市で毎年行われている逗子メディアアートフェスティバル(2014年からメディアーツ逗子)のプロジェクトマッピングに機材協力を行うなど、マッピングには前から注力している。社長の藤井誉は「アーケベルは映像機材からスタジオやポストプロ機能も備えており、コンテンツ制作も行っている。マッピングも企画からコンテンツ制作、上映までワンストップで行うことができる。今後もマッピングをはじめとするイベント映像の企画制作には力を入れていきたい」と意欲を示している。

### ☆アーケベル株式会社

東京都渋谷区渋谷3-8-12 渋谷第一生命ビル4F

TEL.03-3400-0705(本社)

<http://www.arkbell.co.jp/>

